シリアの パレスチナ人支援

内戦開始からまもなく9年目を迎えるシリアでは、昨年以来、状況がかなり安定してきていると言われます。しかし、部分的に戦闘は続き、治安状況が改善した地域でも食料や物資、医療、教育の不足など、人々の生活は相変わらず厳しいままです。当会では、昨年秋に、心理サポートを行う人たちへの研修を実施。またUNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）のクリニックへの医療機材の提供も行いました。

〉〉心理サポートを行う人々を支える

シリアでは、長期化する内戦の影響でメンタルヘルスの分野における支援へのニーズがこれまで以上に高まっています。国連の調査によると、シリアでは、5人に1人がメンタルヘルスに関する問題を抱えており、30人に1人は急性・重度の症状を抱えています。子どもたちも、内戦により家族や周囲のサポートが機能せず、多くが安心できる幼少期を過ごすことができず、心理的ストレスを抱えています。

一方、内戦以前からもシリアではメンタルヘルスに関するサービスは極めて限定的で、内戦後はさらに医療従事者が国外へ避難したり、攻撃を受けるなどしてその数は減少しており、人材不足が深刻です。また、専門家自身も、例外なく深刻な状況に巻き込まれているためトラウマを抱えていたり、「燃え尽き症候群」の恐れがあり、「人道支援に従事する人」を支援することは重要性が高いのです。

アートセラピーの手法を学ぶ

秋にはシリアから、メンタルヘルスなどに携わる専門家たちをレバノンのベイルートに招聘し、6日間の研修を実施しました。面倒な手続きを経て、精神科医や心理学を学ぶ大学院生など11人（女性9人、男性2人）が参加できました。レバノンの児童精神科機関 Family Guidance Center（以下 FGC）の臨床心理士やソーシャルワーカー、アートコーディネーターが講師を務めました。研修後、参加者は学んだことをシリアに持ち帰り、既にシリア国内でワークショップなどを開始しています。当会では、今後も継続して人材育成をしていく予定です。

〉〉ストレスを解決するエクササイズも体験した研修

6日間の研修は、以下のようなプログラムで行われました。

【1日目】紛争下における心理社会的サポートの介入について。紛争下での危機や脅威、特に子どもや女性の保護に関する定義を学び、患者（特に子ども）の問題症状の発見や照会方法、地域コミュニティとのつながりの重要性について学ぶ。 また、地域コミュニティとのつながりを考えるセッションでは、心理的なサポートをしていくうえで様々なアクターとどのように協力ができるかについてグループ発表も。

【2日目】紛争下におけるストレスやその管理方法について。ストレスの定義や原因、具体的な症状と、その解決方法としての呼吸法や曼荼羅を使ったエクササイズ、雄叫び、自分が

グループで1つの物語を作る

安心を感じる場所

参加者は「安心を感じる場所」というテーマで、「お母さんと私」、「夜」、「戦争前に住んでいた家」、「家族と自然」、「家と家族」などを描きました。

「お母さんと私」（右の写真）を描いた女性は、「母は私にとって安心と安全そのもの。母が隣にいてくれる安心感と、母に何か起こったらという不安、2つの感情を抱えています」。

「夜」を描いた女性は、「夫と息子と一緒に過ごす夜。家族が近くにいると安心します。でも夫はいま兵役についていて、とても心配です」と涙ながらに語りました。

「安心を感じる場所」を大きな布に描きそれを体にまとうアクティビティ等を学び、実際に体験。
【3日目】家族や介助者をどのように支援するか。メンタルヘルスや心理サポートは患者さん本人と周りの家族や介助者の協力が必要です。グループセラピーなど集団でのサポート方法、家族や周囲の理解を深めるセッション方法について学習。
【4日目】アートセラピー。アートを用いて話を伝える手法を学ぶ。グループに分かれて、1つの物語を作成させたり、助け合いながら色塗りをするアクティビティを行う。
【5～6日目】レバノン保健省とFGC、ノルウェーの団体が開催したメンタルヘルスに関する国際会議に参加。レバノンやシリアの現場でメンタルヘルスの問題に取り組む有識者や実務者とディスカッションをする機会を得た。

研修に参加した大学教授で女性医師のAさんは、「これまでイラクなど周辺の国で戦争が起こった際には支援をしてきました。その時はまさか、シリア人同士の対立や今回のような内戦が起こることなど想像もしていなかったので、内戦が起こり大きなショックを受けました。メディアでは内戦は終わったと報道されていますが、実際には終わっていません。復興には10年、15年という長い年月がかかります。内戦の影響で、特に女性は多くのストレスに直面しています。身体的な疾患だと思ったら、実は精神的な疾患だったということがあるなど、メンタルヘルスの問題は大きいです。でも、シリアではこの分野の支援が足りていません。この研修を通じて実力のある専門家が育ちそうで嬉しいです」と語ってくれました。

〉〉国連クリニックへ医療機材を提供

長期にわたる内戦により、シリアでは医療サービスが設備・人材面から機能せず、医療サービスへのアクセスも絶たれ、公立病院の多くが機能せず患者を受け入れることが難しい中、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）のクリニックは比較的早く再建・稼働が進み、現在シリア国内にいる40万人以上のパレスチナ難民の多くがそのサービスに頼っています。今年1月にこうしたUNRWAクリニックへ医療検査機材を導入しました。

導入された分析装置とUNRWAの医療スタッフ

戦闘による外傷が減少傾向にある一方で、糖尿病、高血圧、がん、呼吸器疾患、関節系疾患に罹っている人は増大し、WHOによると2014年以降シリアでの死亡の半数近くがこうした慢性疾患によるものでした。多くの人々が国内避難民となり、劣悪な環境での長引く避難生活や情勢の悪化により、既往症を抱える人々の病状はさらに深刻になり、ストレス等により人々の疾患リスクが高まっていますが、慢性疾患は、緊急下では後回しにされがちです。UNRWAによると、2016年時点で18歳以上の5.7%が糖尿病を、10%が高血圧を抱えており、40代以上では13%の人が糖尿病にかかっています。またUNRWAの診療所で糖尿病と診断された患者は、患者全体の15%、高血圧と診断された患者は全体の20%を占め、その予防と血糖管理をすることは非常に重要です。なお糖尿病と相関関係が高い心血管疾患や、糖尿病により発症リスクが高まる癌による死亡は、それぞれ28%、10%でした。

こうした状況の中で、UNRWAからの要請を受けて、4ヶ所のクリニックにヘモグロビンの分析装置を提供しました。糖尿病や高血圧患者、その疑いのある患者の確定診断や治療、また妊婦検診に使われます。2018年は、米国からの拠出停止の影響でUNRWAはかつてない資金不足となり、医療サービスもニーズに対して十分ではありません。そんな中、今回の分析装置は、今後毎年、のべ数万人の検査に活用され、多くのパレスチナ難民の予防や治療に役立てられる予定です。

シリアのパレスチナ人の状況

◆内戦の結果、シリアのパレスチナ難民（45万人）のうち60%にあたる25.4万人は国内避難民となって避難生活を送り、95%にあたる41.8万人は人道支援が必要な極めて深刻な状況下にある。2018年には、シリアにいるパレスチナ難民の8割がダマスカス近郊に居住していた。シリアで最大のヤルムーク・パレスチナ難民キャンプは治安状態が悪く国連も支援はできないものの、ダマスカス近郊の一部パレスチナ難民キャンプへのアクセスが改善している。
◆シリアでは、6万人以上が精神科への通院を必要とし、12,000人は精神科への入院が必要とされる。3人に2人の子どもが、内戦によって家族や近親者を亡くし、家屋が破壊または空爆による被害を受けた。また4人に1人の子どもが、恐怖を感じたり、悲しかったり、心が取り乱された状態であっても相談できる場所や人がないと回答した。
◆内戦によってシリア国内では家族や周囲のサポートが機能しなくなっているが、シリアでは紛争前からもメンタルヘルスに関するサービスは極めて限定的で、2,100万人（紛争前の人口）に対して、精神科医は70人しかおらず、公立精神病院は2施設のみであった。1つはダマスカス郊外にあり、現在は安全面から限定的にしか稼動していない。もう1つはアレッポにあり現在は閉鎖している。

（以上は、諸国連機関の報告書より）